

出羽国の宗教と遺跡—古代から中世の山形市立石寺を例に

山口博之

はじめに

1、天台寺院立石寺

2、古代の立石寺

・立石寺と周辺の古代遺跡・円仁生誕地所縁の地名が存在・「立石倉印」の存在意義

3、街道と立石寺

・慈覚大師を助けた磐司磐三郎・立石寺と交通・立石寺と七尾市海門寺

4、霊場の成立

・入定窟の調査・入定窟金棺と平泉藤原氏金棺・舍利信仰と入定窟

・立石寺入定伝承の成立過程・如法教所碑と経塚

おわりにかえて

はじめに

この地域に仏教の到来を伝えるのは『日本書紀』持統天皇三年（689）正月三日の記事である。「詔曰、務大肆陸奥国優嗜曇郡城養蝦夷脂利古男麻呂、與鐵折請剔鬢髮為沙門、詔曰、麻呂等少而閑雅寡欲、遂至於此蔬食持戒、可隨所請出家修道」と見え、麻呂と鐵折という、脂利古の男子二人が僧侶になりたいと願い出ている。山形県地域にも七世紀の終わりには、仏教の縁に連なる人々が出現したのである。『日本三代実録』の貞観十三年（871）二月十四日には「節婦出羽国田川郡人大荒木臣玉刀自、夫死之後、廬於墓側、帰念仏理、守節不移叙位二階、免戸内租、表於門廬」と見え、田川郡に住む、大荒木臣玉刀自という婦人が、夫の死後その墓の傍らに庵を結び菩提を弔ったという。貞観十五年（873）には飽海郡に住まいする伴部小椋売も、夫の死後その墓の傍らに庵を結び菩提を弔ったという。奈良時代から平安時代にかけては、仏教を信じる出羽国の女性の姿を見ることが出来る。

考古遺物からも仏教隆盛の痕跡を探ることができる。川西町に所在する「道伝遺跡（どうでん）」は、古代置賜郡衙の擬定地の一つであるが、SD1溝跡の第IV層から、木簡が出土し、次の經典名が記されていた。「四天王<> 觀世音經一 精進經一百八 十一面陀一百十 合三百三十> 多心經十六 涅槃經陀六十五 八名普密陀三十」。平川南氏によれば、記載される經典名は、それぞれが妙法蓮華經の觀世音菩薩普門本、精進女問經、十一面陀羅尼經、般若波羅密多心經、大般涅槃經、八名普密陀羅尼經の六種の經典に比定することができるという。記載されたこれらの經典は、古代の辺要国において、その地の守護を祈願して実施された四天王法に関連するという。寛平八年（896）の紀年を持つ木簡、「佛」の墨書を持つ土器も出土している。この地域には9世紀の終わりごろには、こうした經典が蓄積、読誦され、こうした場所は官衙と深い関係があったことを知ることができる。

『続日本後紀』承和四年（837）には古代出羽国最上郡に濟苦院（山形市漆山千手院が後身と伝える）を設ける記事が見える。ついで、九世紀中頃には出羽国に六ヶ寺の定額寺が設けられている。定額寺とは国家により勅額を下された寺であり、八世紀の後半に始まる。官稲を支給されるなど官寺に次ぐ待遇にあったと考えられているが、その性格については必ずしも明らかにされている訳ではなく、寺院の様相についての定説はない。恐らく、有力者の営んだ寺院を国家が公認し、保護を加えたものであろうと考えられる。古代陸奥国

には信夫郡に「菩提寺」、江刺郡に「極楽寺」の二箇寺が置かれ、古代出羽国には年代順に記せば、郡不祥の「法隆寺」(斉衡三年・856年『文徳実録』)、「観音寺」(貞観七年・865『三代実録』)、「瑜伽寺」(貞観八年・866『三代実録』)、「長安寺」(貞観九年・867『三代実録』)、そして最上郡に「霊山寺」(貞観九年・867『三代実録』)、山本郡に「安隆寺」(貞観十二年・870『三代実録』)の六箇寺が置かれた。古代陸奥国には二箇寺のみの設置であるのに対して、出羽国には六箇寺を数える。全国に置かれた定額寺は総数で六十数箇寺であることからすれば、全国の約十分の一が出羽国に存在することになる。

この時期、現在の行政区分の山形県と宮城県の北辺のライン、つまり飛島から東へ鳥海山、さらには奥羽脊梁山脈中の神室山、栗駒山そして太平洋側の室根山を結ぶラインは、律令国家の辺境を形成していた。こうした辺境を形成する地域の安定と、積極的経営の意図をこうした寺院の設置に伺うことができる。

律令政府の奥羽経営の一翼を担って仏教が導入され、斯の如く興隆を知ることができるのである。開発によって安定した地域を、国家としての寺社の指定を通して、さらに宗教的に安定させるという、律令国家の地域経営の意図を読み取ることができる。

以上、まず古代、9世紀平安時代前期までの、この地域の概要を整理してみた。

次に、立石寺を具体例として、古代に成立した寺院が、中世寺院へと変わってゆく様相を整理してみたい。

1、天台寺院立石寺

宝珠山立石寺は、慈覚大師円仁が清和天皇の勅許を得て開いたという名高い霊場寺院。立石寺あるいは単に山寺とも呼ばれる。昭和七年十二月九日(1932)に、国名勝史跡指定を受けた。理由に、貞観二年(860)慈覚大師創建の古刹であり一相坊円海が再興した。延暦寺不滅の法灯は、織田信長の焼き討ちののち立石寺から継ぎ、東北の比叡山として有名。凝灰岩の岩盤に立つ釈迦堂・開山堂、慈覚大師入定窟と(旧)国宝如法経所碑、根本中堂などが立ち並ぶ、奥深く静かな景勝地であることが記される。現在もその価値は損なわれていない。

慈覚大師円仁について日本史辞典では次のように触れられている。「円仁【えんにん】七九四 - 八六四(延暦一三 - 貞観六.一.一四)九世紀の天台僧。入唐八家の一人。慈覚大師。下野国都賀(つが)郡の出身。八〇八(大同三)広智に伴われて比叡山に登り、二一歳で得度。八三八(承和五)天台請益僧として入唐。当初、天台山国清寺か長安行きを希望したが許されず、唐からの帰国命令に反して留住を決意。遣唐船が登州(山東半島)に漂着したのを好機に、同地の新羅寺院である赤山法華院に留まり、五臺山を巡礼した。八四〇(唐開成五)長安に学ぶ。いわゆる会昌の廢仏に遭遇し、還俗を命じられるなどの弾圧を受けた。八四七(承和一四)帰国。八五四(斉衡一)第三代天台座主に勅任、天台密教を確立した。八六六(貞観八)慈覚大師の諡号が贈られた。在唐中の記録に「入唐求法巡礼行記」、伝記に「慈覚大師伝」がある。」とある。東北の天台宗の要衝である立石寺の開山として、この上ない経歴の持ち主といえるだろう。

・立石寺と周辺の古代遺跡

立石寺がその姿を現すのは古代であり、九世紀前後に徐々にその姿を明確にしだす。し

かしながら霊場寺院としてはまだ明確ではない。むしろ「立石倉印」などの存在が示すように、律令政府の庇護を得た古代山林寺院の性格が強いと考えられる。

立石寺がその存在を明らかにした九世紀ころ、山形県は出羽国であり周辺は最上郡であった。移民の力を得て地域経営を進めようとした時期で、遺跡数が爆発的に増加し、古代における地域開発の最盛期にあたる。平地の遺跡（ムラ）は寺院への物資の補給地であり、人材の供給地でもあった。

山岳地帯は、仏教の修業の場として重要であった。現在の境内地よりもさらに奥、磐司磐三郎ゆかりの山岳地帯に、山林抖擻の修業の場と共に、立石寺に関連した山林修行の堂宇が考えられる。たしかに、八世紀末～九世紀初成立の最古の仏教説話集『日本霊異記』（下巻第一四話「千手呪を憶持つ者を拍ちて現に悪しき死の報いを得る縁」）に、小野朝臣庭麿（にわまる）が、加賀郡内の山を点々とし、経を唱え修行すると語られる。奥羽山中に籠って修行する人々の姿が重なる。

ただし山中ばかりが修行の場であったということではなかろう。先ほど触れた『続日本後紀六』承和四年（八三七）六月丁酉条の「済苦院」も関係を持っていたと考えられる。これは立石寺の西側の平野部、山形市漆山守国山吉祥院が後身にあたるという。ここには七体の平安仏が残され立石寺の仏像群との同時性がある。おそらくこの寺と立石寺は関係し、僧の往来なども行われていたと考えられる。里から山中へと僧たちは動きながら活動をしていたのであろう。また、里は仏僧の人材供給地でもあった。さらに周辺に広がる須恵器窯跡や条理遺構と集落遺跡は、立石寺の存在を支えるものであった。立石寺西側五キロほどの山形市上敷免遺跡は、八～九世紀のムラ跡であり、S T 26 竪穴住居跡から「□〔浄カ〕万下西寺」と墨書された須恵器坏が出土した。寺の前に複数の文字が見える場合一般には寺名であり、この墨書表記は小字名を冠する寺名である可能性が高いという。浄万という地の下西寺と読むことが出来ようか。平地の寺とも関りをもったものであろう。

こうした社会的経済的充実の上に立石寺が成立する。ついで、当初から円仁の出生地である下野国とゆかりが深いことも注目しなくてはならない。

・円仁生誕地所縁の地名が存在

立石寺の西側地域には、栃木県の地名と共通する芳賀（はが）（芳賀郷=宇都宮市東側）、長岡（ながおか）（長岡郷=宇都宮市北側）、梁田（やなだ）（梁田郷=足利市南側）、阿蘇（あそ）（阿蘇郷=佐野市一帯）があり、移民との関連が注目される。また、中世に立石寺は成生荘の一部であるが、成生も栃木県の地名に存在した。栃木県矢板市長岡（宇都宮市北側）の堀越遺跡から、九世紀後葉～十世紀代前半代の土器体部に「成生庄 上」と記された資料が出土し、在地の富豪層の荘園経営の拠点である「庄家」「庄所」と考えられている。

九世紀前後には立石寺周辺にムラが存在し、さらに須恵器・土師器を供給する窯も操業し、ムラには寺院も存在し、関東方面からの移民の痕跡が残る。さらに、古代印の存在は律令国家の庇護のもとに成立した可能性がある。

・「立石倉印」の存在意義

立石寺には一顆の古代印「立石倉印」が伝えられている。倉印は、奈良・平安時代に使用された諸国や寺院の倉の印のことであり、正税稲・宝物などを収納する正倉の管理のため

に使用され、寺院の財政権が独立していることの象徴となろう。貞観二年立石寺開創にあたり円仁が清和天皇から拝領した銅印と伝え、「おかないん」とも呼ばれている。

この印章は畿内近国以外に残された稀な古代印であり、江戸時代にはよく知られていた。享保十一年（一七二六）『山寺状』には、「立石倉印」四文字の鉄印を清和天皇から賜り今に残ると記される。寛政十二年（一八〇〇）松平定信編纂の、重要な古書画・器物・武具類を集成した、図集『集古十種』（印章部下）にも「出羽国最上立石寺蔵清和帝所賜」として収録された。

印の総高は五.五cm、鈕幅三.四cm、鈕厚〇.九cm、印面側高〇.九cm、印面縦四.八cm、同横四.七cm、蒼鈕で鈕孔はない無孔蒼鈕（むこうがんちゅう）で印面が方形を呈し、「立石倉印」の四文字と、鈕の基部に「上」が鑄出され、年代は九～十世紀と考えられている。時枝務氏は印を古代印とし、立石寺と古代国家との結びつきを示す資料で「国印などの公印に準じる性格をもつものと考えられる。その点に注目すれば、立石寺が定額寺などに列せられ、官からの経済的支援を得ていたことを推測」できると見た。この時期の定額寺に立石寺の名前はないが、印は立石寺が律令国家の庇護を受けた寺院として始まったことを示すというのである。

印面に記される立石を立石寺と見れば、九世紀から十世紀にかけて立石寺という寺名があったことを示している。印面文字が四文字のため、寺が省略され「立石倉印」と記されたのだろうか。

「立石倉印」は著名な古代印として研究対象にされた。岸俊男氏は寺院倉印の一つとして「鵜寺倉印」とともに紹介し、寺院の正倉の印であるとした。鵜寺は奈良県の世界遺産法隆寺のことで、「鵜寺倉印」は現在東京国立博物館に納められ国重要文化財となっている。平安時代九～十世紀のもので、印面は方五.五 cm、全高四.九 cm である。立石倉印よりも印面はやや大きく高さは低いが、無孔蒼鈕である点などは同様に、制作年代も一致する。

寺の倉印として知られている事例は、いずれも方形の印面を持ち、大きさは五cm内外で、印面は四文字で共通性は高い。知られている古代印の平均的値は、国の下の行政単位である郡の印（郡印）は一辺約四.五cm、さらにその下の郷の印（郷印）は一辺約三.三cmであるという。「立石倉印」は郡印に近いものである。

「立石倉印」は「鵜寺倉印」と同様、寺院正倉の管理に使われた可能性があるが、残念ながら倉印が押印された文書は存在しない。さらに、同様の印を伝えた、法隆寺と薬師寺は奈良の大寺院であり官寺である。立石寺は遠く離れて出羽国にある。なぜ共通して倉印が存在するのか、なぞは深い。

2、街道と立石寺

・慈覚大師を助けた磐司磐三郎

霊場が場所を定めるには、地理的要素も重要であった。街道を把握することは霊場を行き来する人々の往来安全、さらには経済基盤確立のためにも重要であった。立石寺に関係深いのが二口街道である。

ここには興味深い伝承が残る。もと立石寺の地は磐司磐三郎という狩人（マタギ）の住処であった。磐司磐三郎（一人とも兄弟とも）は対面石で慈覚大師と対座し、一山を譲ったと伝えられる。これにより、立石寺一帯は仏地となり、狩人の生害の危険がなくなった

動物たちは、感謝の踊りをささげたという。今も民俗芸能のシシ踊（鹿子舞）が七月七日（旧暦）に行われ、磐司磐三郎の祠の前で踊られている。磐司を祀る祭礼は江戸時代には存在する。寛延二年（一七四九）『立石寺役田帳』には、「七月八日 一、磐治祭幡 毎年壹度」とある。

この磐司とは何者なのであろうか。日本民俗学を大成した柳田國男氏は、立石寺の『山立根本之巻』により磐司磐三郎を「…磐神はすなわち岩の神で…」あると見た。『山立根本之巻』はマタギに伝えられる巻物で、狩猟行為の正当性（清和天皇より全国山中の狩猟許可を得た）証明である。磐司は岩の神でマタギの神なのであった。

二口街道沿いには磐司の名を持つ巨岩がある。宮城県側名取川上流の二口沢と大行沢の中間にある磐司岩は、高さ百五十 m もの垂直な岩壁が三 km 以上の長さにつながるもので、昭和二十年（一九四五）二月二十二日に国指定名勝に指定されている。磐司伝説は陸奥国と出羽国東西を結ぶ二口街道にそって広がり、立石寺に結ぶのである。

さて気が付かれた方がいるだろう、磐司、あるいは磐司磐三郎が岩の神で、狩人に関係があれば、全国にひろく存在するのではなかろうかと。実は日本各地の霊山に、その名（静岡県賀茂郡東伊豆町天城山周辺に万三郎岳、すぐ隣の静岡県伊豆市菅引には万二郎岳など）が残る。北関東から東北の山々に縁が深く、山の神を助ける狩人の兄弟（青森県岩木山には万字・錫杖）、マタギの祖先などの名として伝わるのである。

とくに有名なのは日光開山伝承に関わる磐司磐三郎である。日光は世界遺産として知られているが、もともとは関東平野の北辺に位置する霊山男体山を中心とする信仰が中心であった。山頂には古墳時代、奈良・平安時代、さらには中世から近世にいたる祭祀遺跡が営まれている。この地の万（磐）三郎伝説は、日光の権現は上野国赤木の権現（赤城山）の権現と度々戦をし、赤木はムカデの形、日光は大蛇の形で戦うがなかなか勝てない。このため万三郎が助力し倒せたら、日本国中の山々で狩りを認めると約束した。結果、日光権現が勝利し、万三郎は国中の狩猟御免を認められ、日光山の麓に正一位伊佐志大明神として祀られることとなる。日光でも磐司につらなる神はまつられているのである。下野国からの立石寺周辺への移民をはじめ日光・立石寺の関係は深い。

・立石寺と交通

古来、奥羽山脈を越えて山形（出羽国）と仙台（陸奥国）を結ぶ交通路として、南に「笹谷越え」、北に「関山越え」があり、中間の「二口越え（二口街道）」は、陸奥側の仙台と出羽側の山形を最短で結ぶ主要交通路であった。二口街道は宮城県仙台市秋保地区を通過して出羽へと抜けるが、峠越えに南北二つのルート（口）があるので二口峠という。

街道に沿って太平洋へと流れる川は名取川であり、名取老女や実隆中将など数々の伝説に彩られ、西行は「名取川きしの紅葉のうつるかげは同じ錦を底にさへしく」（『山家集』）と詠んでいる。平安時代にはすでに利用され、都にまで知られていたことを示す。このうち南側ルートは清水峠を越え山形市高瀬地区を通り、南下し城下町山形へ向かう。北側ルートは山伏峠を越え立石寺の門前を通り、南下し城下町山形へ向かう。この道が結ぶ山形市街地への入り口は「二口橋」であり、現在もその名をとどめている。本来は、最上川の川湊である寺津へ結ぶ、北側ルートが主要街道ではなかったかと思われる。

『山寺名勝史』には「本村より宮城県に通ずる山嶺を山伏峠といひ、其の南、高瀬村よ

り越ゆる山嶺を清水峠といふ。因て後世之を二口峠と称す。而して立石寺奉行本間出雲守、大いに山伏峠の道路を修めしより清水峠は殆んど廢道となり単に山伏峠を二口峠と称するに至れり」、立石寺から山伏峠を越えて陸奥側に結ぶ道が主体で、整備は立石寺の奉行本間出雲守によって進められたと記され、近世二口街道は立石寺の權益のもとにあったことがわかる。これは中世でもおなじであったのではなかろうか。初代山形県令三島通庸が、北方の関山峠にトンネルを掘鑿し新しい道路を開通させた後、二口街道の交通量は減少、山寺地区が経済的痛手を被ったというのは、權益が失われるのであるから当然のことであろう。なお街道は現在その名残をとどめるのみである。

二口街道北側ルートは、最上川の川湊寺津へと結ばれていた。宇境から直線道路の存在を復元できる。日本でもまれな平安時代の清池石鳥居をくぐり抜け、湊に面する日枝神社に接続する街道である。街道は平安時代末に遡るであろう。寺津とは寺の湊を意味し、寺とは結ばれる立石寺であり、天台宗と深い関係がある日枝神社も一体であろう。

清池石鳥居は立石寺の表門ともされ関係が深い。鎌倉時代清池（庄外）郷石仏寺に納められていた善光寺式三尊像の主尊、阿弥陀如来（現在神奈川県横浜市港南区千手院）に文永三年（一二六六）九月十五日「奉安置出羽国最上郡府中庄外郷石佛」と背面に陰刻される。

この銘文により、この地が「府中」と記される土地であったことがわかる。さて、府中とは主として中世に使用された、国府に由来する地名の一つである。国府とは国の行政組織自体かその所在地のことであるから、鎌倉時代中頃にはこの地に出羽国府が置かれていた可能性がある。出羽国府に関連する街道であるから主要街道となる。おそらく平安時代の半ばから末にかけて、それまでの出羽国府（酒田市城輪柵跡遺跡）からこの地域へ国府が移転していたのであろう。

さらに、長井政太郎氏は、近世交通路を復元するなかで、寺津は近世最上川舟運において重要な川湊であり、明治初年以前はここから二口峠を通して仙台方面への物資輸送がさかんであったと整理した。

立石寺が寺津と結びついていたことは二つの意味で重要なことであった。一つ目は「府中」の存在が示す、出羽国の政治的中心と結びついていた可能性があること。二つ目は寺津は最上川水運で日本海側の湊町酒田に結び、さらに日本海舟運で能登・敦賀さらに平安京と結ぶことができたことである。

・立石寺と石川県七尾市海門寺

海門寺は七尾南湾に面し、現在の七尾港に近く中世府中の東側にあたる。驚くべきことに、所蔵の保元三年（一一五八）の木造千手観音坐像には、遠く離れた立石寺の神木を用いたと記される。像は、寄木造りの平安後期の作で、像高六三.八cm、膝張五二.四cm、膝奥三二.六cm、臂張三四.八cmを測る。頭上に頂上仏面と十体の化仏を配し、合掌手・宝鉢手のほかに脇手を備え、右脚を上結跏趺坐する。石川県内に所在する最古の在銘彫刻である。平成十六年の解体修理に伴い発見された、胎内墨書銘には次のように記される。

「三尺五寸千手観音 小面十五躰 躰御身能登国阿修羅処 靈木申、小面十五躰出羽国立石寺慈覚 大師靈木并所々靈木申也、(中略) 千手能登・越中及千口靈木也、 保元三年(年次戊寅)七月廿五日(壬午)日奉木札始、 同年八月三日(庚寅)率奉造立始、 同

年十月八日（甲午）開眼供養了、願主平氏市井頼行并 散位平□□紀氏」

仏像の造営に銘木が求められ、軀部は能登国の阿修羅処の霊木、頭上にある小面十五躰は出羽国立石寺慈覚大師の霊木など、千本の腕は能登国と越中国の霊木ほかと記す。遠隔の能登の仏像に、慈覚大師霊場出羽国立石寺の霊木がことさらに重要であったのである。慈覚大師入定の霊場であったからであろう。平安時代後期に慈覚大師入定の処という伝承が広く知られるようになったことを表すのであろう。

想像を膨らませれば、立石寺で採取された木材は、清池石鳥居をくぐり最上川の川湊寺津へと運ばれ、湊町酒田に陸揚げされ、さらに日本海舟運によって七尾に向かったのであろう。このルートは天台宗がその影響力を發揮した交通路でもあった。立石寺境内の寺社にある白山・米山への信仰は、この結びつきの痕跡を示すものであろう。

この時期の日本海舟運が盛んであったことを示すのは珠洲焼の流通である。七尾からほど近い能登半島の突端、珠洲市で焼かれた珠洲焼は、立石寺西側の大森山経塚で経甕に使われ、北海道までに活発に流通した。

日本海交通の枝先の一つは、立石寺へと結んでいたのである。

3、霊場の成立

・入定窟の調査

入定とは高僧が死去することを表し、高僧の墓ともなる。立石寺には円仁の墓が守り伝えられている。山上百丈岩の頂近くの裂孔（窟）の一つに営まれているので、入定窟と呼ばれる。立石寺の最も重要な施設であり、堅く守られてきた聖域である。

ここに立石寺の格別の配慮を得て立ち入りが許され、三回の学術調査が重ねられた。一回目が昭和二十三年（一九四八）十一月一日、二回目が二十四年六月二十四日、三回目が同年十月二十四日と二十五日に行われた。まず立石寺入定窟調査の実際と調査成果をみてみよう。さらにその後の研究の進展をふまえ、当初調査成果を再整理してみたい。

信仰の根幹に調査の手が入るとは、今ではなかなか考えにくいことである。昭和二十三年前後は、戦後の高揚した雰囲気の中で、従来は秘仏とされた仏像や、見ることさえかなわなかった文化財について調査が進められた時代でもあった。敗戦直後で、憲法も新しくなりそれまでの価値観が大きく変化した時代にあたる。昭和二十五年（一九五〇）には朝日新聞文化事業団による学術調査として、岩手県平泉町中尊寺金色堂平泉藤原氏四代のご遺体調査が行われ、入定窟の人骨を分析された鈴木尚氏も参加している。

昭和二十三年（一九四八）十一月一日、立石寺住職清原英田師の理解と英断で入定窟の開扉が許され、軽部恭順・長井政太郎・川崎浩良・佐藤栄太氏が調査者となり行われた。

慈覚大師入定窟には「金棺・檜造りの一個の首・小塔婆・骨片」が納められていた。

鈴木尚氏による詳細な人骨調査によって5体分の人骨（第一号～五号）が確認され、慈覚大師円仁の骨は、五号人骨に充てられた。この骨には古い時代の特徴があり、唐にまでわたり修業したということに結びつく頑健さが認められ、土葬した骨を掘り起こして金棺に納めるという行為がうかがわれ、頭部の骨を欠いてそれを肖像彫刻に置き換えるという、特殊な状況で納められているのである。

さらに、約四十年後（1989）になるが、鈴木尚氏は円仁と推定した五号人骨について補足し「(四号人骨よりも)身長が低かった…体格というのは非常に鍛錬された…健脚であ

った…（骨の）表面が溶けたようになっておりまして…どこかに一べん埋葬されたものを後世、後世といってもそう後ではなくて、適当な時期に移されたものと、そういう骨の状態をしております」と整理した。

つまり五号人骨は、生前非常に身長が低くて、しかも健脚であり、一度土葬されていたものを後世掘り起こし、さらに移したという特徴が認められるというのである。

結論として、入定窟の調査によって、慈覚大師は直接的な史料などを欠くものの、骨の形質研究と美術史的考察から、最初に比叡山で入滅したのち掘り（右橈骨・左右大腿骨・右脛骨）出され、円仁肖像の頭部彫刻と揃えられ、金棺に納められ、ここ立石寺に至ったとし、入定窟への慈覚大師入定の可能性を肯定した。

・入定窟金棺

さて立石寺入定窟金棺であるが、わたしは平安時代の金棺は入定窟と、平泉中尊寺にもあるから類例はほかにもあるのではなからうかと思っていた。ところが、文献史料・絵画資料・考古学資料など幅広く探してみても金棺の実例は驚くほど少ない。絵画資料にわずかにあるが、実物は全国で立石寺と中尊寺金色堂に納められた計四例が知られるのみで、いずれもが国重文となっている。なぜ金棺が用いられるのか。

・金棺の意味

平安貴族の事例を見ても遺骸を納めるのに金棺を使用したという事例は明らかではなかった。類例として触れておきたいが、納骨容器として使用される金箔捺の資料も驚くほど少ない。わずかに奈良県の世界遺産元興寺に納入された納骨五輪塔に一例（鎌倉時代の納骨五輪塔水輪部の内側に金を捺したもの）と、文明十三年（1481）に没した一条兼良の納骨容器の「金ハク五輪」（『雑事記』文明十三年四月廿九日条）があるが現存しないという。これまた事例は少ない。

興味深いことに、宗教的に重要な聖人が金棺とともに語られることがある。嘉元四年（1306）十月十八日備後浄土寺文書の『定證起請案』（『鎌倉遺文』第30巻41頁）に「留三骨於磯長廟之金棺、或南海而往来、彰双足於伯瀬山之石面」とある。三骨とは三骨一廟（聖徳太子・母・妻の廟所）という聖徳太子廟所のいわれであり、磯長とは聖徳太子の廟所である。聖徳太子もまた金棺に葬られたと考えられていたのかもしれない。さらに、藤澤典彦氏のご教示によれば、奈良時代の僧で東大寺建立に尽力した行基の棺も金棺と見られた可能性があるという。奈良県生駒市の竹林寺に伝わる『竹林寺縁起』には、行基が葬られた伝承がある興山墓地の興山は、行基の遺体を入れたのであろう金棺を納めたので、「興山」と呼ぶという。

そもそもなぜ金棺を使うのだろうか。実は釈迦が入滅した時に納められたのが金棺であったとされる。平安時代後期（11世紀）の絵画に国宝「絹本着色釈迦金棺出現図」（京都国立博物館）がある。この図の主題は釈迦が金棺から再生する「金棺出現」であり、「小涅槃経」と、それに先行する「仏母経」が関係し中国に由来する。釈迦如来が涅槃に入り金棺に納まった直後、仏母摩耶夫人は須弥山の頂上にある切利天から駆けつけ、金棺に取りすがって嘆き悲しんだ。そのとき釈迦は大神通力をもって自ら棺の蓋をあげ、身を起して母のためにこの世の無常の理を説き、説き終って再び棺の蓋を閉じたことを、絵画化したも

のである。これは、釈迦が棺のなかから合掌して立ち、釈迦を仰ぎ見て立つ仏母摩耶夫人に偈を説いている場面である。

十一世紀代には金棺は釈迦の入滅に関連してその遺骸を保存するものであり、釈迦はのちに復活したと考えられ絵画にも描かれた。中国五代に先行する事例がある。十二世紀代の金棺も同様に、遺体の保存と復活が期待されたのではなかろうか。

中世後期に慈覚大師は棺から飛び出し立石寺の入定窟へと納まったという伝承が確立した。これは釈迦が金棺から再生する場面を連想させる。そして再び金棺に納まったのが入定窟金棺と見ることはできまいか。金棺は遺体を保存し復活を助けるものと考えられたのであろう。入定窟金棺に納められた慈覚大師頭部と遺骨もまた霊場での復活を待っているのではなかろうか。

それでは、慈覚大師はなぜ掘り出されなくてはならなかったのであろうか。

・舍利信仰と入定窟

鈴木尚氏は、円仁と考えられる五号人骨の状態について「(骨の)表面が解けたようになっておまして…どこかに一ぺん埋葬されたものを後世、後世といってもそう後ではなくて、適当な時期に移されたものと、そういう骨の状態をしております」と整理した。掘り出された時期は埋葬されてからそんなに経っていない時期という。円仁は貞観六年(864)一月十四日に入滅するから、それからそう遠くない時期というと、十世紀から十一世紀の平安時代中期を想定することができようか。さきの金棺の時期に重なる。

この時期頃から以降、舍利信仰の高揚に伴い、聖人の墓が開掘されたことが知られている。金棺にかかわる聖徳太子の墓、行基の墓も舍利信仰の高まりの中で開掘された。

今尾文昭氏は、元久年間(1204~6)聖徳太子御廟、文暦二年(1235)檜隈大内陵墓(天武・持統陵)、同じく文暦二年行基廟の開掘を整理した。特に行基墓は、僧慶恩がそこで舍利を得るなどの瑞兆を経て、ついにはわたしの墓を開けと託宣があつて開いたという。この場合、盗掘か開掘かは一概に判断できるものではなく、当時の信仰の在り方を反映しているという。佐藤重聖氏も舍利信仰と開掘について、平安時代末以降盛んになる舍利信仰の高まりによって、聖人墓の開掘が行われた。その行為は勸進聖の活躍によるところが大きく、磯長廟の聖徳太子墓を開いた二人の聖は、得た舍利をもとに各地を勸進したという。

もともと舍利とは、仏陀の火葬された遺骨であるが、信仰の対象も拡大しの中には聖者のものにも適応された。円仁は貞観二年(860)に比叡山で舍利会を行っている。中国でも当初は仏舍利が重要視されるが、唐代以降には高僧の舍利も仏舍利同様に重視されていくようになり、靈性を有するものと認められ礼拝の対象となっていく。

平安末期から鎌倉初期に日本で信仰された舍利の種類は、金胎房覚禅『覚禅鈔』の「三種舍利事」に「舍利有三種。一骨舍利。其色白也。二髮舍利。其色黒。三是肉舍利。其色赤色也 云々」とあり、骨だけではなく、髪や肉片までもが舍利として存在する。舍利は信仰の対象とされ、人々から求められるようになったために種類が拡大したのであろう。舍利信仰の高まりは、新たな舍利を必要とし、前代の聖人の墓を開削しその骨を舍利として信仰するという事態が周辺では起きていたのである。

立石寺第二期には、舍利信仰の高まりがありそうした状況のもとで、慈覚大師の骨舍利が立石寺入定窟金棺に納められたのであろう。

この経過は、立石寺にかかわる史料の中で、再整理されてゆく。すまわち、当初比叡山で入滅した円仁は、出羽国立石寺の入定窟へと、飛んだというのである。

・立石寺入定伝承の成立過程

まず九世紀代に編纂された『慈覚大師伝』には「此山上勿造諸人廟。唯留大師廟。我没之後。植樹驗其処。」とあり、比叡山には最澄の廟所のみとし、自分の墓は木を植えるだけとすると記される。比叡山に円仁の墓は造らないとされた。ついで、十一世紀代『本朝神仙伝』には、入滅に及んで姿を消し草鞋のみ残したとする。墓はなくどこかに去ったというのである。十二世紀『如法教所碑』には「殊仰大師之護持、更期慈尊之出世、奉納之靈坼」とあり、日蓮は、十三世紀弘安三年（一二八〇）の紀年を持つ太田入道あての書状に「慈覚大師の御はかはいづれのところに有りと申す事きこえず候。世間に云フ。御頭（首）は出羽ノ国立石寺に有り伝伝」と記し、慈覚大師の首が立石寺にあるとした。

ついで、十四世紀代永徳三年（一三八三）の群馬県世良田長楽寺『慈覚大師画像』には、入滅の後片方の沓（草鞋）を残して、下野国日光へと飛び至り供養の後、出羽国立石寺へ入定したとする。ここで姿を消した行き先として出羽国立石寺が現れる。同時期の『山門秘傳見聞』に、円仁の入定所はニカ所で、比叡山で入滅したのち棺を飛び出し、紫の雲に乗って出羽国へ至ったという。『山門建立秘訣』にも、前唐院で入滅後、草鞋の片方を落とし出羽国へ飛び至ったとある。

この両書は比叡山の古い伝承を記録したもので、成立は南北朝期のはじめまで遡り、片方の草鞋を落とすという伝承は、中国高僧伝にある「達磨」の説話につながるという。円仁の入定伝承は変化をみせ、中国にまでその視野を広げながら展開するのであった。

大きくは、平安時代初め入滅当初の墓は比叡山の華芳とされていたが、平安時代中期にはやがて疑われ、中国高僧伝の達磨の説話に結びつきながら、墓の存在が不確かとなり、鎌倉期から南北朝には出羽国立石寺へ入定したと定まり、近世になると立石寺入定の伝承が完成にいたったと整理できようか。

慈覚大師入定伝承の始まりは、先ほどの金棺と舍利信仰の検討に重なる時期となることを知ることができる。もう一つ重要なのは、経塚の造営である。立石寺には経塚造営の記念碑である、如法教所碑が残されている。

・如法教所碑と経塚

如法経は、一定の規式に従って経典を書写しさらに供養することである。如法経には円仁の関りが深く、天長十年(833)に比叡山横川で行なった法華経書写が日本最初となる。書写した経典を永年保存する施設が経塚である。経塚に埋経される経典は、規式に従い如法に書写されることが重要であったため、経塚から発見される経典や経筒外容器に「如法」あるいは「如法経」と記されることがある。

国重文の立石寺如法経所碑（高さ一〇七、五 cm、幅四七 cm、厚さ一八、二 cm）は、規式に従い書写した経典を納めた経塚を造営したことの記念碑である。天養元年（一一四四）の紀年をもち、立石寺一山の基底をなす凝灰岩で制作されている。

如法経所碑には次の銘文が刻まれている。

<刻銘>

維天養元年歲次甲子秋八月十八日丁酉、真語宗
僧入阿大徳、兼濟在心、利物為事、同法五人、凝志一
味、敬奉書妙法蓮華經一部八卷、精進加行、如經所
説、殊仰大師之護持、更期慈尊之出世、奉納之靈崛、
願既畢、願令參詣此地之輩、必結禮拜此經之縁因、
一見一聞、併麼巨益、上則游知足之雲、西則翫安養
之月、于時有積以慶、及作銘日

善哉上人 寫經如説 利益所覃 誰疑記前 」

<現代語(案)>

天養元年甲子(きのえ)の年、秋が感じられる八月十八日(七十二候の一つ『蒙霧升降』の近く、円仁の常行三昧は中秋の月明らかなる十一日暁より十七日夜まで不断に行うものであった(三宝絵詞)のでこの近くともなる)丁酉(ひのととり)の日に、真語宗の僧である入阿、大徳、兼濟は五人と志を一つにして、ここに敬しんで法華經(妙法蓮華經一部八卷)を書するものです。經は精進して儀式にしたがって写しました。これを(慈覺)大師に御護りいただき、更には慈尊(弥勒菩薩)が現れる(五十六億七千万年後)まで保存されることを願って、(慈覺大師のおられる)靈崛に納め奉ります。願くは此の地に参詣される方々にも、必ずこの經を禮拜していただきたいものです。この縁は一見一聞ではあってもたいへんご利益があります。上には弥勒菩薩が住むという知足(兜率天)の雲に遊ぶようなもので、西には安養(極樂浄土)の月を親しく眺めるようなものなのです。以慶がこの文章を作りました。たいへんありがたいことです。写經の功德の利益はひろく行き渡るので、だれも法華經の功德を疑ってはなりません。

碑文には結集して法華經を書写したこと、精進加行し如法經書写の儀式に即して写したことが記され、慈覺大師の靈場であるこの地に經塚が営まれることが高らかに宣言されている。根本中堂東側の地からは仁安二年(一一六七)三月二十三日の紀年を持つ、定果坊が納めた經筒被蓋も出土している。おそらく立石寺境内には次々と經塚が営まれたのであろう。

如法經を納める經塚を営むことは大変な事業であった。

如法經書写は法華經を写すことが多い。如法經書写を行う道場は如法堂であり、比叡山の諸堂を記す『山門堂舎記』の根本如法堂の記事に「石墨草筆手自書写法花經一部」と、円仁が根本如法堂で石墨草筆を用い、法華經を書写したことが記される。

石墨草筆とは、書写にあたって普通は使用する墨と硯の代わりに、石と草の茎を使用して經典の書写にあたるというものである。墨は油煙で作るのでこれを避けて硬い石を用い、これを磨る硯は柔らかい石とし、墨を使わずに薄墨のような色を出している。さらに獸毛筆を避け、草であるヨモギの茎を用いて筆に充てるという。

規式に従い如法經書写がさかんに行われた、鎌倉時代の書写は次のようなものであった。関根大仙氏によれば、まず、最初に正懺悔に入る前の七日間に「前方便」として、「堂莊嚴事」「諸文」「行水事」と進む。次の二回目から三回目の七日間に「正懺悔」が行われた。四回目の七日間によろやく「如法經筆立作法」に入る。石墨草筆と清浄な横川の水を使つ

て経を記すのはまさしく法身文字であり、三世諸仏と三身如来の正体であると意味が示される。覆面をつけ清浄を守って事あるごとに五体投地（両膝・両肘・額を地につけて、尊者・仏像などを拝する）を繰り返す、まさに如法に書写が進むのである。必要な期日は「前方便」に七日「正懺悔」に十四日「如法経筆立作法」に七日、さらに「如法経筒奉納次第十種供養」が必要であるから、前後三十日に及ぶという。鎌倉時代嘉禎二年（一二三六）宗快によって、『如法経現修作法』（大正新収大蔵経 悉曇部第八四卷）がまとめられた。円仁の時代よりも新しいが、この『如法経現修作法』は書写が繰り返され、如法経の教科書とでも言うべきものだった。この中に「一。山門月藏房宰圓記。山上多用之。是三塔并大原法則載之。委細之如法経法則。三塔大原此四不可過也」という一文があり、作法は比叡山東塔・西塔・横川・大原の原則で、如法経の詳細はこの内容に従っているとする。

如法経文言の初出は、九世紀初め群馬県桐生市山上多重塔（延暦二十年（八〇一））、ついで熊本県宇城市浄水寺碑（天長三年（八二六））にも如法経の文字如法経文言が記され、平安時代前期には全国に展開した。不思議なことにそのあと十世紀代には消滅する

本格的に展開するのは十一世紀後半となる。その後十二世紀代には九州から東北までの広い範囲で如法経碑は出現する。

■永保元年（一〇八一）熊本県上益城郡御船町如法経ノ碑、■永久二年（一一一四）京都府綾部市河牟奈備神社如法経碑、■文治五年（一一八九）岐阜県養老郡養老町多岐神社如法経碑、■（立石寺 如法教所碑 天養元年（一一四四））、■久安四年（一一四八）岐阜県大垣市赤坂町妙星輪寺如法経碑、■文治五年（一一八九）岐阜県大垣市多岐神社如法経碑、■文治五年（一一八九）岐阜県大垣市正円寺如法経碑、■文治五年（一一八九）岐阜県養老郡養老町多良観音寺跡如法経碑。

経塚も同様の展開を見ることが出来、経塚の紀年銘からすれば、わずか四〇数年の間に列島（長治二年（一一〇五）鹿児島県大隅町月野、久安五年（一一四九）秋田県大森町八木沢）の隅々へと拡大した。これに遅れて、五輪塔や宝塔など石造物の造営も、地域拠点を中心に全国に広まり、交通路の整備ととともに、情報が広範囲に動く時代なのである。出羽国はこのような宗教的な状況の中にあっただのである。

おわりにかえて

立石寺は、9世紀代に古代山林寺院として成立した。寺名はおそらく立石寺であったのであろう。銅印の存在からは独立的な寺院であった可能性がある。東北に慈覚大師と関連する寺院（黒石寺・中尊寺など）が出現し、山岳地帯に古代寺院が建設された時期にあたる。交通路も重要であった。様相はよくわからないが、10世紀代から11世紀代半ばに古代寺院から中世寺院への大きな変換点があったと考えられる。11世紀代後半は中世立石寺霊場信仰が芽生え、12世紀半ばにかけて確立した段階となろう。この時期如法経碑は全国に広がり、同じく経塚も全国へと広がる。慈覚大師入定窟もこのあたりで整備され、入定伝承も立石寺へと結びついただけと思われる。

以上立石寺の存在から出羽国の宗教と歴史の一斑について見てきた。必ずしも横手市周辺の歴史に合致するものではないが、資料の少ない地域の歴史を考えようとするときには、周辺地域の動向を把握し参考とする。という意味では重要なことと考える。